

大学院におけるフィールドワーク教育の実践

— 筑波大学人文地理学・地誌学教室の事例 —

松井圭介・兼子 純

キーワード：フィールドワーク教育，人文地理学，地誌学，筑波大学 大学院

I はじめに

人文地理学の学術論文において，研究手法としてのフィールドワークの重要性は論を待たない。斎藤功は著書の冒頭でフィールドワークの重要性について，次のように指摘している。「地理学が地域の空間秩序を求め，その空間的特性（地域性）を解明するために，地域研究（フィールドワーク）を重視することでは，大方の同意がえられるように思われる」（斎藤，2006；3）。同時に昨今の地理学界をめぐる風潮のなかには，「フィールドワークを重視することは，一般性，法則性を求める姿勢と矛盾するものではない。しかし性急に「一般性」あるいは「法則的傾向」を求める学徒にとって，フィールドワークを重視することは，地域への埋没であると批判され，フィールドワークを重視した研究はおろそかにされる嫌いがある」（斎藤，2006；3）と述べ，フィールドワーク軽視の風潮に警鐘を鳴らしている。

地理学においてフィールドワークは実際に重要視されているのであろうか。近年の地理学関連の学会誌において，フィールドワークに基づく研究論文がどのくらい掲載されているのか，またそこでは，どのようなフィールドワークが実際になされていたのであろうか。

2003年から2010年の8年間に刊行された『地理学評論Ser.A』『人文地理』『経済地理学年報』3

誌の人文地理学に関する掲載論文において，研究方法としてフィールドワークに基づいているものは278本であり，全体（496本）の56%であった。年度別にフィールドワークを用いた論文数とその方法別に示すと以下の通りである。

2003年	30本／65本（46.2%）	聞き取り：25， アンケート：7，観察：1
2004年	43本／74本（58.2%）	
2005年	51本／70本（72.8%）	聞き取り：31， アンケート：17，観察：5，その他：4
2006年	36本／71本（50.7%）	聞き取り：25， アンケート：6，観察：5
2007年	36本／60本（60.0%）	聞き取り：35， アンケート：5，観察：2
2008年	29本／50本（58.0%）	聞き取り：13， アンケート：7，観察：4，その他：6
2009年	25本／58本（43.1%）	聞き取り：20， アンケート：6，観察：6
2010年	28本／48本（58.3%）	聞き取り：17， アンケート：4，観察：3，その他：12

（用いられている手法はいずれも複数集計）

年次により若干の差異はみられるが，概ね過半の論文においてフィールドワークが資料収集の手法として用いられている。なかでも聞き取り調査は最も基本的な手法であり，アンケートや観察を

用いた論文のなかでも、聞き取り調査と併用されているものが多数を占める。聞き取り調査は次の3つに大別することが可能である。第一に、構造型の面接を行う手法であり、調査項目を事前に用意して、数多くの話者からの聞き取りする悉皆調査型の聞き取り調査である。特に農村を研究対象とする論文で顕著であり、これらの研究では、聞き取り調査から得られた資料を重要な1次データとして利用しているものが数多くみられる。第二に、自治体など公的機関に対する聞き取り調査である。この場合、聞き取りは付随的に実施されており、統計類などの資料収集を主目的とする研究が多い。第三に、特定の企業・個人に対する集中的な聞き取り調査である。企業調査や個人へのライフストーリーの聞き取りなどが該当する。

アンケート調査もフィールドワークの定番であるが、聞き取り調査と比較してその件数は少ない。アンケートの手法としては、郵送法、留置法といった伝統的な手法に加えて、メール法やWeb法といったアンケート方式を利用した論文も増加している。また現地での景観観察に基づく論文も少数であるがみられた。景観観察の成果は土地利用調査という形で表現されることが多い。

以上、近年の学術雑誌における研究手法としてのフィールドワークの傾向について概括した。周知のようにこれらの査読誌の投稿者は、フィールドワークの経験が必ずしも豊かではない30代以下の若手研究者・大学院生が過半を占めている。その意味でも大学院学生に対する体系的なフィールドワーク教育は重要であるといえよう。冒頭にも述べたように、人文地理学におけるフィールドワークの重要性は論をまたないが、大学院のカリキュラムにおいてフィールドワークを正規の科目として設置している大学は僅少である。そこで本稿では、前身校時代よりフィールドワークを大学院の正課教育として取り入れ、地域調査を学風としてきた筑波大学の人文地理学・地誌学教室を事例として、大学院におけるフィールドワーク教育にかかわる具体的な実践の検討を通して、フィールドワークの方法と意義および安全について考え

ることを目的とする。

本稿の論文構成は以下の通りである。II章では、大塚地理学の学統である臨地研究がどのように行われ、また位置づけられていたのかを考察する。続いてIII章では、筑波大学におけるフィールドワーク教育のカリキュラムと歴史について、大学院の野外実験を事例に検討する。さらにIV章では、人文地理学・地誌学研究室におけるフィールドワーク教育の実践と成果および課題について検討するとともに、大学院教育をめぐる環境変化について議論する。最後にいささか懐古的ではあるが、東京高師・東京文理科大・東京教育大から筑波大学へと引き継がれてきたフィールドワーク教育への考え方について、関係者の言説を通して敷衍してみたい。

II 大塚の地理とフィールドワーク教育への関心

1) 地誌学と臨地研究

大塚における地理学スクールを初期段階から実質的に建設・育成したのは田中啓爾であった(本稿では、東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学、筑波大学における地理学を総称して、「大塚」と呼称する)。1929(昭和4)年に創設された東京文理大は、地誌研究に特色があるとされたが、田中地誌学の具体的な研究方法として、臨地研究・巡検が非常に重視され、田中啓爾自身徹底して臨地研究を実践した(高野, 1977)。『東京文理科大学閉学記念誌』には、「地理学教室の歴史」として、田中啓爾のもとで育まれた大塚の学風が次のように記されている。「大塚学風の一つは或る地域を定めて一週間合宿滞在上、学生各自にテーマを持たせて臨地研究を行うことである。(中略)臨地合宿指導を行うこと、而もそれを入学の初年即ち第一学年で実施すること、臨地前に於ける諸準備・研究はもとよりであるが、合宿中に受ける厳しい指導と調査研究に対する訓練は本学独自のものである。」(東京文理科大学, 1955: 271)。このような田中による徹底した臨地研究とその教育実践については、「足で稼いで打ち立て

た地理学」(生野, 1975)や「巡検にはじまって、巡検に終わる」(三浦, 1975)と評されている。

東京文理大地理学教室の特色として尾留川は、研究テーマの広さと自由さを指摘している。自然地理学と人文地理学の2講座を有し、講師・助手・副手に数多くのスタッフを抱えていた東京文理大は、野外での臨地調査・実証的研究と自由な研究分野の選択および指導に特色があった(尾留川, 1977)。東京文理大の野外調査では、学生5~6人に対して、教授あるいは助教授と助手2人が同行したので、学生にとっては個人指導に近いものであった。また1年次には人文地理・地誌の野外実習、2年次には自然地理の野外実習があり、それぞれ進級論文を提出して3年次の卒業論文に取り掛かることになっており、自然・人文両分野の研究能力が養成された(尾留川, 1977)。こうした正課におけるフィールドワーク教育に加えて、地理学教室の教官・学生・卒業生を中心に組織された大塚地理学会(1924年に東京高等師範学校地理学会として発足)においても、教室スタッフ指導による日帰り巡検が日曜ごとに行われ、こうした学会における活動も、臨地調査の伝統を育てる重要な役割を果たしていた(尾留川, 1977)ものと考えられる。

このような東京高師・文理大以来培われてきた筑波大学人文地理学・地誌学研究室を、フィールドワークに基づく実証主義的な地理学であるとする学統の構築は、随所に語られているが、その例として、『東京教育大学地理学研究報告XXI』(1977年3月刊)を手がかりにし、当時の教官の言説からフィールドワーク教育に対する意識を検討したい。『東京教育大学地理学研究報告』誌は、東京教育大学理学部地理学教室の紀要として、1957(昭和32)年に「地理学研究報告」として創刊され、1977(昭和52)年の第21号をもって刊行を終了した。同年3月に東京教育大学理学部はその機能をほぼ停止し、教官全員が筑波大学地球科学系に移行することに伴う措置であった。終刊号となった第21号は、名誉教授2名を含む、14名の教官が「地理学教室のあゆみ」というテーマのもとに寄稿している。

2) 人文地理学における野外巡検の姿勢

(1) 浅香幸雄

「高師地理の研究と教育の特色の一つに、「野外巡検の重視」があげられよう。筆者も入学後1ヶ月ぐらいのときに、土曜日の午後に山本幸雄先生の1年生のための「飛鳥山・王子付近の巡検」が行われた。これは入学後最初のことであっただけに、印象は深い。飛鳥山の崖上から展望して、断層崖か、浸食崖か、石神井川のギャップ、その下に広がる扇状地や三角州、王子製紙工場、脚下の鉄道線路……におよばれていた。日曜日を1日使う先生主導の学年別の巡検も年に2回はあった。これらは地理学会(筆者注:東京高師地理学会、後の大塚地理学会)でプランを立てて行なったもので、自主巡検というべきものであろう。また2, 3, 4年には2, 3泊程度の単位旅行が行われた。筆者のときは、2年が花井先生の桂川・甲府盆地・岳麓・清水三保、3年の内田先生の東北(常磐炭田・阿武隈高地、郡山付近の開拓、仙台・松島・石巻)4年の田中先生の伊香保・軽井沢・長野・野尻湖・妙高高原・高田であった。」(浅香, 1977: 40)。浅香は、このような野外巡検が個人による自発的巡検を誘発したことを指摘し、自身の学問的関心であった歴史地理学への契機を、文理大1年次の静岡巡検にあったと述べている(浅香, 1977: 40)。田中啓爾による人文地理研究法の巡検が、1933(昭和8)年9月初旬に静岡市で行われ、浅香は清水市の地域調査を行っているが、このときの成果は、大塚地理学会論文集に掲載され、その後の40年にわたる清水市史編纂事業へとつながっていった(浅香, 1977: 41)。浅香は後に東京教育大学地誌学第二講座の教授となるが、こうした調査地との継続的なつながりの背景に、大塚地理学の巡検尊重、徹底した実証主義的学风があるものと思料している。巡検は「単に調査や研究上のことだけでなく、多くの人々に接して、その研究に対する熱意や努力が認められ、やがては社交といったものも身につくようになり、資料収集に難航したときの打開策もまた案出できるようになって、最終の研究成果が得られるようにな

る」(浅香, 1977; 43-44) のである。

(2) 奥野隆史

1951(昭和26)年に東京教育大学文学部に入学した奥野は、2学年進級時に地理学教室に進んだ。奥野は当時の教育大地理学教室の雰囲気や学生の視線から、詳細に描写しているが、なかでも巡検・野外実験に対する思いの強さがうかがわれる。「(浅香)先生は頻繁に日曜巡検を行なわれた。ある時は武蔵野、ある時は川崎といったように東京近郊をわれわれを案内された。われわれ学生にとっては、これが大きな楽しみであり、国府の調べ方や宿場町の考え方や屋敷森の意味など実際に事物を地理学的に観察する方法を教え込まれた(奥野, 1977; 59).」このような非公式に実施された巡検が当時の学生にとって、重要な地理学への誘いとなっていたことが想起される。さらに奥野は地理学教室における野外実験の意義について、多くの文言を費やしながらか回想している。「一代を画する諸先生による講義からわれわれの得た知識は計り知れないものがあるが、それにも増してわれわれの地理学への目を開かしめたのは野外実験であった。私の在学期間に6回の野外実験が行われたが、私は三野・福井・浅香・尾留川の先生の実験に参加した。三野先生の巡検は京都および奈良の断層地形を対象としたもので、町田先生とともに京都盆地の南西方山麓や比叡山や木津付近の断層を見てまわった。(中略)「地形学」で学んだ三角末端面とかケルンコル・ケルンバットの観察法とかを実際に目で確かめることができた。福井先生の巡検は佐渡の国中平野で行われた。ここでは気象観測と既成気象データの整合性とか気象と農業との関係とかがテーマに選ばれ、吉野正敏先生から室内実習で教えられていた観測器具の実際の使い方や既成の気象データの読み方などを教授された。人文地理学に関心をもっていた私にとっては、観測器具を実際に使う体験をしたのがこれが初めてであり、自分なりに気候学的な調査法が理解できた積りであった。浅香先生の東海地方への巡検は、われわれが専攻の学生となって初

めての巡検であったため、最も印象の強いものであった。駿豆鉄道の韭山駅に下車したとき、先生は、「君達は、この場所で教師の立場で生徒に説明しようとしたとき、どのように説明するか」と問われ、遠くの事物から順次近くの事物へと説明対象を移していく方法を教えられた。興津の清水食品KKの女子寮に宿泊して、焼津から牧の原、御前崎方面へとバスで見学を行なった。漁港、茶畑、砂丘農業など詳細な説明があり、その際の先生の知識はわれわれにとって驚嘆すべきものであった。この巡検と一緒に参加されていた上級生の永見順一氏から、地理学の真髄は野外調査にあるのであって、それゆえに巡検には必ず参加すべきだといわれた。私も学生にその通り教えている次第である。尾留川先生の巡検は直江津および高山に対して行なわれた。高田に現地集合し、深雪地帯での生活様式、城下町の特徴、高田平野の開拓、天然ガスの利用などを直江津で、小京都といわれる高山の特徴などを教えられた。この巡検の際に田中啓爾先生のいわゆる“性の地理学”やチューネン圏構造を初めて耳にしたのである(奥野, 1977; 59-60).」

(3) 幸田清喜

関東大震災の翌年に東京高師に入学した幸田は、高師時代の思い出として、田中啓爾による8泊9日の信州巡検(屋代-松代-須坂-飯山-長野-大町-四家-浅間温泉-伊那-高遠-飯田-諏訪)および内田寛一による岐阜金山から富山笹津までの中部横断巡検について記している。こうした教員指導による巡検に加えて地理学教室としての巡検も用意されていた。幸田は1930(昭和5)年に文理大に第2回生として入学すると、教室の年中行事であった1年生の合宿巡検に参加している。このときのフィールドは福島盆地であった。学生各自がテーマを持ち、調査した内容に関して夜間にゼミを行うという形式であった。この時の調査成果をゼミで発表したとき、1学年上級にいた青野に、「それ位なら、小学校の先生でもやれるぞ」と批評され、学問の厳しさを教えられ

たと述懐している。幸田によれば、この合宿巡検は文理大閉学まで毎年必ず行われたという(幸田, 1977; 70)。

幸田は1953(昭和28)年に東京教育大教授として着任したが、教員として巡検の楽しさを語っている。「巡検も思い出は楽しい。大学院13回、学部7回、共同調査や個別調査を行ない、殆ど全国に渡って見聞を深めた。所変われば品変わる、タイプの異なる地域にじかに触れることは、地理学研究の要諦であろう。辻村先生もデービスの言を引用して、「地理学者は大地に触れる度ごとに新たな力を得ることヘルクレスと同じである」といわれた。「ワラジをはいて」は教室の伝統的用語になっている(幸田, 1977; 71)。」

3) 自然地理学における野外巡検の姿勢

(1) 福井英一郎

大塚地理学における地誌研究と研究方法としてのフィールドワークへの関心は人文地理学のみならず、自然地理学においても同様に理解されていた。地誌学・自然地理学講座の福井英一郎は、自分の目に映じた大塚地理学の研究・教育上の大きな特色として、一貫して地誌と野外巡検が重視されていたことを指摘している(福井, 1977)。自然地理学、人文地理学の2講座制で発足した東京文理大の地理学教室は、その後東京教育大学において、地誌学・自然地理学、地誌学・人文地理学、水収支論の3講座を加えた5講座体制に拡充された。地誌学の名称を冠した講座が2つ増設されるとともに、地理学科の専任全教官が、それぞれの専門分野以外に日本および世界の地誌を必ず担当した。全教員で地誌の講義を分担することは、「健全なる地理学者としての自覚」を促す効果があったと、福井は述懐している(福井, 1977)。

「野外実験、すなわち野外巡検は(中略)地誌的研究への道程としてこの教室ではこの教室では当然重視されねばならぬものであった。したがって単位取得に必要な日数や回数も他の大学に比べるとかなり多かったのではないかと考えられる。(中略)学部においては、3泊4日をもって1単

位とし、原則的には各講座に属している野外実験(毎年1回実施)に全部参加することを要求されていた(福井, 1977; 95)。」このように、自然系の講座においても、地誌研究と方法論としてのフィールドワーク指導が重要視されていたことが窺える。

(2) 市川正巳

第二次世界大戦後復員した市川は、1946(昭和)21年に東京文理大に入学する。日本の学問界にとって、外国との学術的交流が長らく途絶えていた当時は、自分の研究の位置づけについて手探りの時期であった。市川は不安を抱えながら、自分の研究分野に関する世界の趨勢を知るために、日比谷にあったアメリカのCIE図書館に日参する。多数の外国文献を渉猟するなかで市川は、「日本の地理学の研究も決しておくれしていなかったことが明らかとなった。この点については、大塚学派とよばれる本学の伝統的地理学的研究の特色とする野外あるいは隣地研究に基づく定量的研究が世界の研究趨勢と一致していたことを物語るものである(市川, 1977; 45)」と述べている。市川は1953(昭和28)年から10年にわたり東京教育大学で助手を勤めたが、その間の思い出として野外巡検の意義を次の言葉で語っている。「この10年間の助手時代は長かったが、実力を蓄積するには役立ったと思っている。その間いろいろなことがあったが、学部や大学院の野外巡検に三野・町田両先生と行を共にし、学問的にはもちろん、人間的にも裨益するところが多かったし、学生との親密感を得るのに最もよい機会であった。また、三野先生の教室における講義は、私ども学生のころからそうであったが、話されていることがわかりかけるのはようやく3年生になってからであったと思うが、特に教育大になってからは学生が先生の講義を理解するのに骨を折ったことと思っている。しかし一旦野外巡検に参加した学生は、先生に野外観察の鋭さと絶妙な解釈に接し、学生は目を白黒するほどで、ここではじめて先生の偉さを認識した学生が数多いのである。この野外観察の

仕方は、地理学的調査におけるいわゆる大塚学派の伝統であり、今後もこのよき伝統を継承して行かねばならないと痛感している一人である(市川, 1977: 45)。

Ⅲ 筑波大学大学院におけるフィールドワーク教育

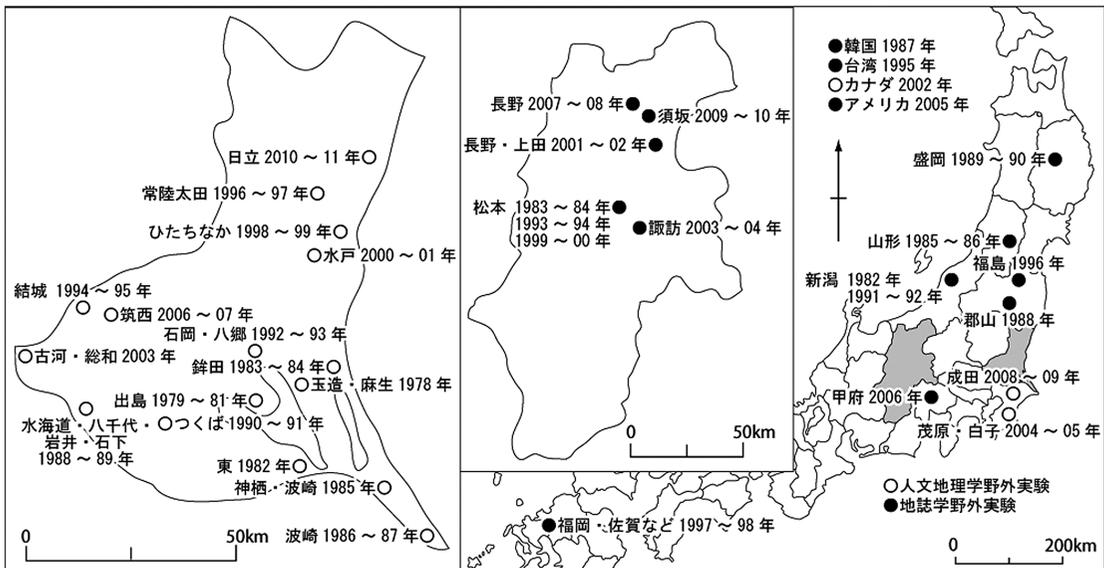
筑波大学人文地理学教室と地誌学教室では、それぞれ毎年1週間にわたる野外実験を実施している。両分野に所属する学生は原則として、(単位履修の有無にかかわらず)野外実験に参加し、報告書(『地域研究年報』, 旧名『地域調査報告』, 同『霞ヶ浦地域研究報告』)に論文を執筆・掲載することが要求される(第1図)。本章では、筑波大学大学院におけるフィールドワーク教育をカリキュラムの側面から検討する。ここでは人文地理学教室、地誌学教室が所属する生命環境科学研究科を中心に述べるが、歴史地理学教室(人文社会科学研究所)、社会科教育学教室(人間総合科学研究科)における地理学野外実験・実習に関しても言及したい。

1) 野外実験・実習カリキュラム

(1) 生命環境科学研究科

2011年(平成23年)度現在、人文地理学教室と地誌学教室は、筑波大学大学院生命環境科学研究科に属している。人文地理学分野と地誌学分野は、地形学、水文科学、大気科学、空間情報科学、陸域・水循環システム、海洋・大気相互システムの6分野とともに、前期(修士)課程では地球科学専攻地球環境科学領域、後期(博士)課程では、地球環境科学専攻内で分野を構成している。入学定員は前期課程39名、後期課程11名であるが、いずれも専攻単位で合否判定はなされている。

前期課程の場合、開設科目は(専攻全体の)共通科目、領域共通科目、および(各分野の)専門科目から構成される。人文地理学分野(平成23年度)を例にとってカリキュラムを紹介する。講義科目として、専任教員による「人文地理学方法論(担当: 田林 明)」, 「社会地理学特論(担当: 山下清海)」, 「文化地理学特論(担当: 松井圭介)」の3科目(各1単位)があり、不定期に開講される「人文地理学特別講義(担当: 非常勤講師)」(1単位)と合わせて毎年3~4単位が開講される。



※地名は野外実験実施当時

第1図 筑波大学人文地理学・地誌学研究室の野外実験(1978~2010年)

演習科目として、「人文地理学演習（担当：田林・山下・松井）」（3単位）があり、分野の全教員・学生による合同ゼミナールである。さらに野外実験科目として、「人文地理学野外実験（担当：田林・山下・松井）」（3単位）がある。開設科目の設置形態は各分野ではほぼ同一であり、東京教育大学以来の旧地理学・水文学5講座に由来する分野はいずれも「講義・演習（ゼミ）・野外実験」をセットで開講している。

表1は、筑波大学大学院生命環境科学研究科地球科学専攻地球環境科学領域、および同地球環境科学専攻における野外実験にかかわる科目シラバスを示したものである。前期課程の修了要件は30単位以上を修得し、修士論文の審査および最終試験に合格することである。大学院生は原則として、所属分野の講義・演習・野外実験の単位取得が義務づけられている。地球環境科学特別野外実験はⅠ・Ⅱは、地球環境科学領域の共通科目として、隔年で開講（1単位）されている。2005（平成17）年度に新設された科目であり、人文系分野（人文地理学、地誌学、空間情報科学）と自然系分野（地形学、水文学、大気科学）が協力しながら合同開講する野外実験である。学問領域の細分化が進行する現代において、文科・理科にまたがる総合科学としての地理学の特性を活かすことを趣旨としている（写真1）。筑波山や霞ヶ浦など大学周辺や菅平といった大学施設のある場所をフィールドとして、日帰り～3泊4日程度の行程で実施されている。

前期修士課程の野外実験では、一週間程度の現地合宿をして、それぞれの分野の特性を活かした臨地調査が行われている。後期博士課程では、野外実験は研究企画野外実習Ⅰ・Ⅱの名称で開設されている。これは修士課程の野外実験と同一行程であり、博士課程の大学院生には指導的な役割が期待されている。野外実験の企画・運営から論文執筆にいたる一連の研究プロセスを体験することによって、将来、大学その他の研究・教育機関で活躍することを期したプログラムといえる。野外



写真1 地球環境科学特別野外実験の様子

（2005年）

実験の歴史や具体的な方法については、後述する。

筑波大学では、生命環境科学研究科のほかにも、地理学に関する大学院の野外調査にかかわる正規科目を開講している。人文科学研究科の歴史・人類学専攻には、歴史地理学分野があり、「歴史地理学野外実験」を毎年実施している。歴史地理学に加え日本史専攻者等の参加もみられ、これまでに秩父市や銚子市、三浦市などでフィールドワークの実践が行われた。一つの地域を対象に、少人数のグループないし個人を単位として、複数年かけて調査することに特徴がある。大学院における野外実習の方法については、山本ほか（2008）に詳しい。調査成果は隔年で発行される『歴史地理学調査報告』『歴史地理学野外研究』（計1～14号）に報告されるほか、成果刊行物として、石井編（2008）が得られている。人文科学研究科ではほかに、国際地域研究専攻において「地域調査法Ⅰ」（隔年）が開講されている。国際地域研究専攻は、ディシプリンを異にする複数教員による学際的な教育課程であり、日本、アジア、ヨーロッパ、アメリカなどエリア別に分野が置かれている。「地域調査法」は、ⅠとⅡの2科目が隔年で開講されており、それぞれ地理学、民俗学におけるフィールドワーク教育の機会を提供している。期間は3泊4日程度である。

人間総合科学研究科には、社会科教育学に関わ

表1 筑波大学大学院生命環境科学研究科地球科学専攻地球環境科学領域および地球環境科学専攻におけるフィールドワークに関わる実験カリキュラム(2010年度)

科目名	単位	課程	開講 年次	授業概要	備考
地球環境学特別野外実験Ⅰ・Ⅱ	1	修士	隔年	自然環境と人間のかかわりを多面的に地域的に見る目を養うために、自然科学と人文科学の両分野が共同で一つの地域を定めて、現地調査やデータ収集の方法を実地で指導し、総合的見地から地球環境科学を教えることのできる研究者を育成する。	ⅠとⅡ で隔年 開講
人文地理学野外実験	3	修士	毎年	自然環境と人間のかかわりを多面的に地域的に見る目を養うために、自然科学と人文科学の両分野が共同で一つの地域を定めて、現地調査やデータ収集の方法を実地で指導し、総合的見地から地球環境科学を教えることのできる研究者を育成する。	
地誌学野外実験	3	修士	毎年	一週間の現地合宿において受講者各自が定めた研究テーマにそって調査法を指導する。全体地域と部分地域のかかわりや、地域を構成する諸要素の連関に留意しつつ、調査結果の分析とまとめ方を指導する。あわせて報告書作成のための指導も行う。	
地形学野外実験	3	修士	毎年	特定地域を選択し、そこで1週間程度の合宿をして、景観観察や土地利用調査、聞きとり、アンケート調査などの野外調査の方法、および結果の分析とまとめ方を指導する。あわせて報告書作成のための指導も行う。	
水文科学野外実験	3	修士	毎年	水文科学に関連する諸課題について、野外調査・観測の方法、データの整理・解析、結果の解釈などについて実地に指導する。	
大気科学野外実験	3	修士	毎年	野外のフィールドにおいて受講生が協力して、データ収集を実施し、得られたデータの定量的な分析方法を演習する。	
空間情報科学実験	3	修士	毎年	空間情報科学の立場にたつ地理学の研究に必要な分析手法(自然環境的・人文現象的な空間データや属性データの取得、および解析の方法)を取得するための実験実習を実施する。室内実験だけでなく、野外実習も取り入れ、現地で空間現象をモニタリングしデータベース化する方法とともに、自然環境的・人文現象的諸要素の相互影響関係の現地調査法を学ぶ。	
研究企画野外実習Ⅰ	3	博士	毎年	地球環境科学にかかわる研究テーマを各自が設定し、調査計画を立案・実行することによって、自立した研究者になるためのトレーニングを行う。研究計画の立案・遂行や、研究成果のとりまとめ、それぞれの段階で助言・指導を行う。	
研究企画野外実習Ⅱ	3	博士	毎年	同上	

(筑波大学大学院生命環境科学研究科 博士前期課程地球科学専攻地球環境科学領域2010シラバス、および同博士後期課程地球環境科学専攻2010シラバス http://www.geoenv.tsukuba.ac.jp/files/Geosci_syllabus_2010.pdf http://www.geoenv.tsukuba.ac.jp/files/Geoenv_syllabus_2010.pdfより作成)

るコースが設置されており、地理学にかかわる野外実習として、「社会科教育学演習Ⅰ」が開設されている。社会科教育関係の大学院生に対するフィールドワーク実践の場であり、調査の成果は、『地域と教育』（博士課程学校教育学専攻）として刊行されている。社会科教育、地理教育に関わるフィールドワークの場としては、修士課程の教育研究科において「地理学野外実験」が開設されている。行程は3泊4日であり、グループ調査を行なう。特徴として、人文地理と自然地理の教員が協同で巡検を担当している点が挙げられる。実験の成果は、『自然と暮らし』として報告されている。

2) 野外実験・実習の歴史

表2は、人文地理学野外実験および地誌学野外実験の実施状況を示したものである。1978年11月に人文地理学野外実験を実施して以来、現在(2011年)まで34年にわたり、野外実験を行ってきた。農閑期にあたり、天候の安定する初夏(5~6月)ないし秋から初冬(10月~11月)に行われることが多い。野外実験の成果は論文として発表されて、これまでに34冊の報告書(『霞ヶ浦地域研究報告』1~4号、『地域調査報告』5~26号、『地域研究年報』27号~)が刊行されている(写真2)『地域調査報告』20号(1998年3月刊行)に野外実験の小史が整理されている(佐々木ほか, 1998)。本項では、佐々木ほか(1998)および筆者の体験から、野外実験・実習の歴史を概括したい。

野外実験は、大塚地理学の伝統である「野外の実態の調査体験を出発点として地域を思考する学問的基盤」を養う訓練の場として、筑波大学開学当初から設置されていた。人文地理学分野では、東京教育大学時代に長年フィールドとしてきた南伊豆に代わる地域を模索するなかで、霞ヶ浦沿岸地域が選択された。南伊豆では、集落をめぐる海域や耕作域、山域などの多様な環境資源を利用した特徴ある生活形態に着目する地域生態概念に基づいて研究が進められてきた(佐々木ほか, 1998)。筑波移転にあたりヤマ、里、水域が織りなす多様な自然的・人文的条件を有しながら独特



写真2 野外実験の成果刊行物

な生活様式が展開し、同時に首都圏外縁部に位置し、都市化の影響を受けてダイナミックな地域変容がみられるフィールドとして、霞ヶ浦沿岸地域が選択された。人文地理学分野では、1978年の茨城県玉造町・麻生町の報告書(「霞ヶ浦地域報告」1号)を皮切りに、出島村、東村、鉾田町、波崎町、神栖町と霞ヶ浦周辺の町村を対象に野外実験を行ってきた。1988年からは霞ヶ浦周辺から茨城県内各地にフィールドを広げてきた。水海道市、岩井市、八千代町、石下町、つくば市、石岡市、八郷町、結城市、常陸太田市、ひたちなか市、水戸市、古河市、筑西市、日立市など茨城県南西部から中央部、北部にいたる県内主要域を網羅的にフィールドに取り込みながら、現在に至っている(市町村の名称はいずれも刊行当時)。2004年からは隣県の市町村にも対象地域を広げ、千葉県九十九里地域(茂原市、白子町、一宮町)や成田市でも野外実験の報告書を作成している。人文地理学分野の野外実験は、山本正三、高橋伸夫、田林明、山下清海らによって主宰され、若手教員やOB・学生らとともに野外実験の歴史を創ってきた。地図(地形図)と空中写真に野外観察と聞きとり調査をベースとした野外調査の伝統とスタイルは、人文地理学野外実験によって構築されてきたといっても過言ではない。

地誌学分野は1983年から野外実験の報告書作成に加わった。この年から報告書名を「地域調査報告」と改称し、様々な地域の地理的特質の比較研

表2 人文地理学野外実験・地誌学野外実験の実施状況(1978～2011年)

号	主要研究対象地域	分野	実施時期	論文数	執筆者数	代表者	備考
1	茨城県玉造町・麻生町	人文	1978年11月5日～12日	7	16	山本正三	収録論文には自然学類卒業論文(1本)を含む
2	茨城県出島村	人文	1979年5月	10	17	山本正三	
3	茨城県出島村	人文	1980年	7	17	山本正三	収録論文には補論(3本)を含む
4	茨城県出島村	人文	1981年	15	25	山本正三	収録論文には、茨城県八郷町を対象とする論文(1本)を含む
5	茨城県東村	人文	1982年5月24日～30日	9	15	山本正三	
	新潟県	地誌	1982年6月26日～7月3日	3	3	奥野隆史	
6	茨城県銚田町	人文	1983年5月23日～31日	7	20	山本正三	
	長野県松本盆地	地誌	1983年6月25日～7月2日	5	6	奥野隆史	
7	長野県松本市	地誌	1983年5月26日～6月2日	10	12	奥野隆史	
	茨城県銚田町	人文	1984年9月30日～10月6日	5	17	山本正三	
8	茨城県波崎町・神栖町	人文	1985年5月19日～25日	4	22	山本正三	
9	山形県山形盆地	地誌	1985年6月22日～29日 1986年10月11日～18日	12	12	奥野隆史	
10	茨城県波崎町	人文	1987年5月24日～30日	10	25	山本正三	『写真集 波崎の景観記録』を除く
11	福島県郡山盆地	地誌	1988年7月2日～9日	15	16	奥野隆史	
12	茨城県南西部(水海道市・岩井市・八千代町・石下町)	人文	1988年5月22日～28日 1989年5月25日～6月3日	8	28	山本正三	
13	岩手県盛岡市	地誌	1990年6月30日～7月7日	15	17	奥野隆史	
14	茨城県つくば市	人文	1990年5月27日～6月3日 1991年5月26日～6月2日	8	25	高橋伸夫	『筑波研究学園都市関係文献目録』を除く
15	新潟県新潟市	地誌	1991年6月29日～7月6日 1992年6月27日～7月4日	16	16	奥野隆史	
16	茨城県石岡市・八郷町	人文	1992年5月24日～6月1日 1993年5月23日～30日	5	26	高橋伸夫	
17	長野県松本盆地	地誌	1993年6月26日～7月3日 1994年6月25日～7月2日	12	12	奥野隆史	
18	茨城県結城市	人文	1994年5月22日～29日 1995年5月21日～28日	6	30	高橋伸夫	
19	福島県福島盆地	地誌	1996年6月30日～7月6日	14	15	斎藤 功	
20	茨城県常陸太田市	人文	1996年5月26日～6月1日 1997年5月25日～31日	5	33	高橋伸夫	『霞ヶ浦地域研究報告・地域調査報告総目次第1号(1979年)～第20号(1998年)』を除く
21	福岡県・佐賀県	地誌	1997年6月28日～7月5日 1998年5月	17	28	斎藤 功	
22	茨城県ひたちなか市	人文	1998年10月4日～11日 1999年5月23日～30日	7	35	高橋伸夫	
23	長野県松本盆地	地誌	1999年9月 2000年6月	14	22	斎藤 功	
24	茨城県水戸市	人文	2000年9月24日～10月1日 2001年5月20日～27日	7	38	高橋伸夫	
25	長野県長野盆地・上田盆地	地誌	2001年9月 2002年6月	7	15	斎藤 功	
26	茨城県古河市・総和町	人文	2003年5月18日～24日	5	26	田林 明	
27	長野県諏訪盆地	地誌	2003年9月 2004年6月	8	16	斎藤 功	
28	千葉県九十九里地域(茂原市・白子町・一宮)	人文	2004年10月3日～9日 2005年5月22日～28日	7	35	田林 明	
29	山梨県甲府盆地	地誌	2006年5月28日～6月3日	9	19	手塚 章	
30	茨城県筑西市	人文	2006年10月29日～11月4日 2007年5月27日～6月2日	6	37	田林 明	
31	長野県長野盆地	地誌	2007年9月23日～29日 2008年6月1日～7日	9	17	手塚 章	
32	千葉県成田市	人文	2008年10月26日～11月1日 2009年5月24日～30日	6	35	田林 明	
33	長野県須坂市	地誌	2009年9月27日～10月3日 2010年5月23日～29日	14	34	手塚 章	
34	茨城県日立市	人文	2010年10月31日～11月6日 2011年5月29日～6月4日	7	42	田林 明	

対象地域の市町村名は調査時点のものである。

野外実験の成果が報告書として発表されたものについて示した。

(『霞ヶ浦地域研究報告』『地域調査報告』『地域研究年報』1～34号による)

究を促進させることを一つの柱とした。人文地理学野外実験が、茨城県や千葉県といった大学から比較的近い地域の中小都市および農村地域をフィールドとしてきたのに対し、地誌学野外実験では、県庁所在地規模の地方中心都市を選び、都市とその周辺の農山村をフィールドに野外実験が行われてきた。東北地方（山形市や盛岡市、福島市、郡山市）、中部地方（新潟市、松本市、長野市、上田市、須坂市、甲府市など）、九州地方（久留米市ほか）などが対象地域とされている。

地誌学分野における野外実験のフィールドの特徴は、盆地を対象としている点が挙げられる。斎藤（2006）は地誌学野外実験の成果を「文化層序」の解明という視点から松本盆地を事例に、地誌学研究の一般化・汎用性を議論している。そこでは田中啓爾の「地位層」や三沢勝衛の「風土」を参照しつつ、地域生態の発展として盆地における「地域性」や「空間的特色」を時間的、空間的側面から同時にみる見方としての「文化層序」を提唱している。地誌学分野の野外実験は、奥野隆史、佐々木 博、齋藤 功、手塚 章、呉羽正昭らによって主宰されてきた。

両分野の野外実験の相違点を挙げると、人文地理学分野では、対象地域において教員と院生がいくつかの班を組織して、共同で現地調査を実施してきた。例えば、対象地域における生業や経済活動、生活様式、居住形態、社会組織、生活行動、人口構造などのテーマに沿って班を組織し、参加者全体で調査地域の地域特性を明らかにすることをねらいとしている。一方地誌学分野では、学生の自主性を重んじ、教員・学生が個人の問題意識に基づいて研究を対象地域において実践するというスタイルが定着してきた。これは学生各自の学位論文の研究テーマを異なったフィールドにおいて実践するという意図も込められていた。このように両分野の野外実験は、土地利用と景観に着目しながら、人間集団による環境資源の利用の総体としての地誌を描くという点において共通しつつも、テーマ設定において対照的なアプローチをとることによって、相補的な機能を果たしてきたと

いえる。

『地域調査報告』は2005年刊行の27号から『地域研究年報』に改称した。この改称は、大学院生らの研究職への就職環境が変化するとともに、成果主義の意識が高まってきたことに起因している。地域の生態を実証的に描く「調査報告」スタイルは、就職のための業績として評価がされにくいこと、個別の論文において、学術論文として一般性・普遍性を志向するようになったことにより、雑誌タイトルも内容にふさわしいものとするのが迫られたといえる。

筑波大学では開学当初から大学院の博士課程は研究者養成を目的とした5年一貫制をとっており、大学院生は入学当初から研究者志向をもつものが多数を占めていた。大学院生は両分野の野外実験に参加することを通して、フィールドから発想するという地理学の一つの原点を学ぶ機会を得たといえる。野外実験の成果として、佐々木ほか（1998）は大学院における地理学教育の推進を指摘している。「現代の地理学の課題は実に多様であり、ややもすれば全くフィールドを経験する必要のないものも多い。筑波大学の人文地理学分野および地誌学分野出身者はいずれも、この野外実験への参加と報告作成の機会を通して、地域調査の方法を徹底的に訓練され、そこから地理学者として巣立っていったといっても過言ではない。自分の専門分野の研究のほかに、どのような場所においても確実に基本的な地域調査ができ、さまざまな地理的事象に興味をもち、そこから新しい地理学的課題を発見できるようにするのが、われわれの目的であり、それがこの20年間に着実に成果をあげてきたことを確信している。」

IV フィールドワーク教育の実践

1) 野外実験の事前準備

先述したように人文地理学および地誌学野外実験は、同一のフィールドにおいて2年間にわたり実施される。第2図は2008年度と2009年度における野外実験のスケジュールを示したものである。

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
2008年		2年目調査		調査まとめ、図表作成・執筆				入稿、原稿修正		報告書完成		
				事前調査		1年目調査		調査まとめ		2年目調査準備		
2009年		2年目調査		調査まとめ、図表作成・執筆				入稿、原稿修正		報告書完成		
				事前調査		1年目調査		調査まとめ		2年目調査準備		

人文地理学野外実験 ■ 地誌学野外実験 ■

第2図 野外実験にかかわる調査スケジュール（2008-9年度）

2008年度は人文地理学分野が茨城県日立市で1年目の調査を実施した。地誌学分野は長野県須坂市で2年目の調査を実施し、年度末に報告書を作成している。翌2009年度は、人文地理学分野が日立市で2年目の調査にあたり、報告書を作成するとともに、地誌学分野では長野県飯田市で1年目の調査を行なった。参加大学院生はそれぞれの野外実験に参加しながら、フィールドワークの成果を学術論文として発表することになる。ここでは2008-2009年度の人文地理学野外実験の実施方法を事例に検討したい。

(1) フィールドの決定および関係機関との調整

研究対象地域は、基本的に教員が選定する。人文地理学分野の場合、茨城県・千葉県を中心とする関東地方の中小都市で実施することが多い。これは、1970年代の開学当初より、筑波大学周辺地域のことを調べることを主眼としたことに起因する。茨城県での調査には地域貢献の意味合いもあるが、それ以上にフィールドへの近接性が高いため、追加調査の利便性や交通費の節約というメリットが大きいと言える。調査テーマをバランスよく設定するためにも、都市的地域と農村地域の双方が含まれる中小都市は、研究対象地域として選好される傾向があった（第1図）。成田市は東京50～60kmに位置する人口約12万の小都市であるが、1978年に開港した成田国際空港に代表され

る国家的なプロジェクトがなされてきた地域であり、研究学園都市が建設されたつくば市と近似した地理的環境を有している。空港建設にともなう空港関連施設の立地やニュータウンの開発、全国有数の初詣客を誘引する成田山新勝寺、台地上の畑作農業に低地の水稲作地帯といった研究テーマが豊富な地域であり、2年間の調査対象地域に選定された。

フィールドの決定に引き続き、関係機関との調整を行う。市役所・町村役場や商工会議所、JAなどの機関、自治会の区長や商店会長など、調査にあたってお世話になる機関・関係者へのあいさつ、調査内容や対象地域にかかわる相談や調整依頼を行う。これら関係機関・関係者のなかでも、とくに行政機関とのコンタクトは重要である。個人調査とは異なり、大学院の野外実験では、総勢30名以上の参加者が1週間にわたり現地調査を行なうので、地域に与える負荷（調査圧）も大きい。統計資料の利用に際しての便宜や各種地域情報の入手に加え、地域との信頼関係を築くうえでも、行政機関との調整は重要である。

(2) オリエンテーションの実施

フィールドの決定と行政機関へのあいさつを終えると、学生へのオリエンテーションを実施する。参加者全体を対象とした事前オリエンテーションは、野外実験開始2か月前、1か月前、直前の3

回実施している。最初のオリエンテーションでは、野外実験の目的、概要、費用、日程、留意点などの説明を行うとともに、参加者の確定を図る。人文地理学野外実験では、教員・学生によるグループ調査を原則とするので、オリエンテーションに先立ち、地域調査の経験豊富な博士課程院生に協力を仰ぎ、グループ編成や調査テーマについて、意見交換を行っている。

調査グループ数や調査内容は対象地域によって異なるが、調査グループ全体を通して、対象地域の地理的性格を明らかにすることを目的に設定がなされる。これは人文地理学研究室が前身校時代より、実証的な地域調査に基づく地誌的研究を重視してきたことによる。フィールドに顕著な特徴のない地域であっても、地形図とフィールドノートを手し、歩きながら野外を観察し、地域の性格を記述できる地理学者を養成することを重んじてきた学風を受け継いだものである。

成田調査では、以下の6グループ(班)を組織した。江戸時代からの核である新勝寺門前町と1970年代以降の核である成田国際空港を中心に、都市班(成田山新勝寺門前町)と居住班(成田ニュータウンのコミュニティ活動)、低地農村班(印旛沼湖畔集落の生業形態)、畑作農村班(成田空港建設に伴う畑作農村の変容)、観光班(成田空港周辺におけるインバウンド観光)、流通班(成田空港周辺部のフォワード)の6つである。各グループには博士課程大学院生の班長(グループリーダー)を置き、調査計画の立案や現地調査の実施、データの分析、論文執筆までリーダーを中心に調査・研究を進めていくことになる。班員は、学生の希望に基づき班編成を行った。ただしグループ間における学生の学年・専門・問題関心などのバランスを勘案して、教員側で班編成の調整を図っている。

班編成が確定したら、リーダーを中心に具体的な調査計画を立てる。地図類、統計資料の入手や聞き取り先の手配、調査票の作成など、関係機関とも相談しながら、班員同士で決めていく。第3図は成田市における農村調査グループ(低地農村

班と畑作農村班)が協同で作成した調査依頼状である。各班はそれぞれの研究目的に基づいて、調査票を作成している。

こうした班ごとの調査依頼のほかにも、現地調査を円滑に進めるために、自治体の回覧板や市報などの広報誌を利用して、対象地域に野外実験の調査時期と目的について周知を行っている。

地方都市での野外実験には、自動車の利用は欠かせない。筑波大学で所有する公用車を使用するほか、自動車を保有する学生には自動車の利用依頼をしている。野外実験に必要な物品は公用車で運搬する。プリンターや各サイズのコピー用紙、封筒、事務用品などは共用物品として持参するほか、調査期間中はコピー機を1台借り上げて、宿所に設置し、資料複写の便宜を図っている。

2) 野外実験の実践

野外実験は例年、日曜日に集合し土曜日の朝解散する6泊7日の行程である。近年は、人文地理学、地誌学とも1年目の調査が秋冬(10月下旬~11月上旬)、2年目の調査は春夏(5月下旬~6月上旬)の時期に実施するのが通例である。1年目の野外実験は、現地調査を進めながら研究テーマや方向性を絞っていくことに主眼がある。人文地理学野外実験では、初日(日曜日)の朝8時過ぎに大学に集合し、自動車に分乗して現地に向かう。フィールドに到着後、全員でジェネラルサーベイ(概括的調査)を行う。グループリーダーを中心に調査予定地域を巡検する(写真3)。

ジェネラルサーベイでは、地域を全体的に俯瞰し、調査地域に関する具体的なイメージを参加者で共有するためにも重要なものである。

1年目の調査の特徴として、土地利用調査の実施が挙げられる。土地利用調査は、都市中心部および調査対象の農村部において、全員が分担して行う(写真4)。都市計画図や空中写真、住宅地図などの地図情報を参考に、現地をくまなく歩きながら、土地利用の実態を明らかにする。土地利用調査は地域の理解において最も基本的かつ重要な調査であり、野外実験を始める際に必ず実施し

2008年10月20日

成田市役所経済部農政課

主幹

様

筑波大学 生命環境科学研究科 教授 ×× ×

筑波大学大学院 生命環境科学研究科

(十余三班) 大学院生氏名 (全員)

(北須賀班) 大学院生氏名 (全員)

調査協力をお願い

拝啓

時下、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

私どもは、大学院の実習にて、毎年特定の地域に関して地理学の視点から調査活動を行っております。本年および来年は千葉県成田市を対象としており、成田市のもつ地域性やその背景を明らかにしたいと考えております。上記の二つの班では、成田市の農業の中でも北須賀地区の稲作と十余三地区の畑作に着目した調査を予定しており、そのうえでぜひご協力いただきたく、この度お願い申し上げる次第でございます。

ご協力いただきたい内容につきましては、別紙にまとめて記載いたしましたので、そちらをご覧ください。なお、研究室全体での本年の調査活動の日程は、10月26日(日)より11月1日(土)の7日間となっております。その期間内は成田市に滞在しております。

お忙しいなか、大変恐縮に存じますが、どうかご協力を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。なお、ご不明な点などございましたら、おそれいりますが、下記までお問い合わせください。

敬具

連絡先 ×××× (ふりがな)

電話 090 - ×××× - ××××

E-mail: ××@geoenv.tsukuba.ac.jp

【送信3枚のうち1枚目、筑波大学大学院：××××】

(以下、具体的な調査内容について、2枚あり)

第3図 成田市役所への調査依頼状

ている。教育的機能としては、現地での景観を正しく理解し、地図を作成する能力を養うことが目的である。



写真3 成田市におけるジェネラルサーベイの様子 (2008年)

野外実験のスケジュールはほぼ固定化されている。7時半に朝食を食べて、8時すぎにフィールドに出発する。グループのスケジュールによっては、調査時間の一部を、調査のアポイントメントを取ったり、班員でのディスカッションに充てたりすることもある。17時を目安に宿所にもどり、各自でフィールドノートの整理や班員でのディスカッションを行う。18時半からは夕食、19時半から21時過ぎまでゼミを開いている(写真5)。ゼミでは各グループが当日の調査成果や今後の予定等の報告を行い、その後、全体から質疑応答やディスカッションがなされる。

ゼミでの発表は下級生にとっては試練の場であり、聞き取りでのミスや調査不足を指摘されるのが常である。しかし調査が進むと次第にゼミでの意見交換が活性化し、参加者全体で地域誌の理解



写真4 須坂市土地利用調査の様子と農業班の土地利用調査下図 (2010年)



写真5 ゼミの風景 (左：人文地理学野外実験 2009年，右：地誌学野外実験 2010年)



写真6 ゼミ終了後の作業の様子（左：筑西市2007年，右：成田市2009年）

が進んでくることが体感される。フィールドワークの醍醐味に気付いた院生の表情が生き生きとしてくることからもうかがえる。ゼミが終了しても、グループによっては引き続き、資料整理やコピー、フィールドノートの作成、研究の方向性にかかわるディスカッションなど、日付が変わる時間を過ぎても作業を続けることも少なくない（写真6）。体調管理もフィールドワークにとって重要なことであり、翌日の調査に支障をきたさないように、上手に休むことも勉強といえる。またアルコールを片手に参加者同士の親交を深めることや、より活発な意見交換を行う姿もみられる。野外実験はフィールドワークの実践的教育の場であると同時に、懇親の場として「同じ釜の飯を食べた同期」的な連帯感を強める機能も果たしていると言える。

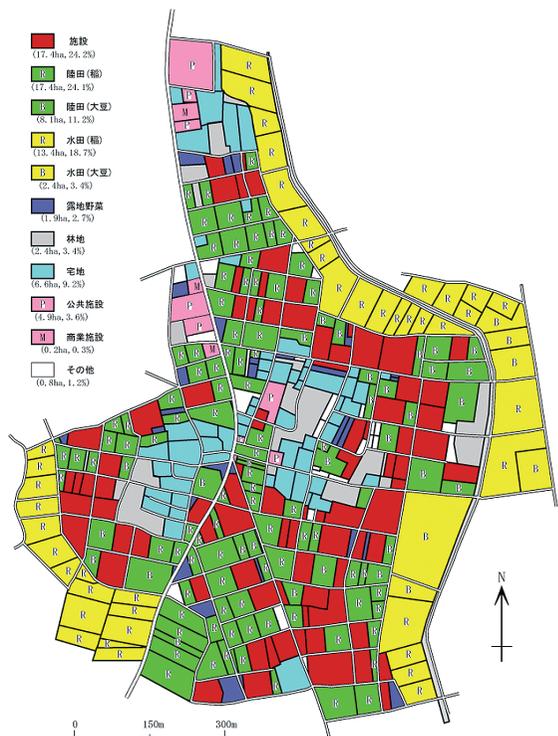
野外実験終了後、調査でお世話になった人々に対して、礼状を執筆・送付することが重要である。さらには、収集資料を整理し、次年度の調査への課題発見や準備を進めていくことになる。土地利用調査は下図に着色作業を施したうえで、専門の技術職員に製図作業を依頼している（第4図）。

3) 2年目の調査

2年目は報告書作成の年であり、1年目の成果を受けて、必要に応じて調査内容の変更や新しい研究テーマの設定が図られるが、野外実験の実施方法は基本的に1年目と同一である。野外実験開

始前に関係機関との調整を行う。1年目調査においてすでに関係機関と大学院生の間でコンタクトが取れているので、調整は比較的スムーズに進む。資料依頼なども教員を経ずに直接依頼がなされることが多い。

オリエンテーションは4月から5月にかけて3回開かれるが、ここでは研究テーマの確認と進捗



第4図 農村調査における土地利用図例（筑西市）（2007年）

状況の報告を行うとともに、調査グループの再編成が図られる。参加者は原則として2年間の参加が要請されるが、課程修了や様々な理由により、2年目に参加できない大学院生がいる。また修士・博士の1年次生は新規参加になるため、各グループへの振り分けが必要となる。1年目の調査メンバーを核としながらも、新規メンバーを加えつつ、新しい班編成がなされる。その際に、調査内容の引き継ぎや確認が重要とされる。

野外実験のスケジュールは日曜日から翌土曜日までの6泊7日で、これも1年目と同一である。初日の日曜日には、ジェネラルサーベイを行う。そこでは1年目の成果をもとに、グループリーダーが手際よく現地説明をする姿がみられる。土地利用調査は1年目に実施しているため、原則として2年目は行わない。2年目は報告書作成ということもあり、より演繹的な目的をもった調査となる傾向がある。聞き取り調査票の作成は無論のこと、アンケート票を作成し、野外実験時（あるいはその前後）に配布・回収を行うこともしばしばなされる。報告書作成に向けて、どのようなストーリーを描くか、またそれにあわせていかにして必要なデータを得るか、2年目の調査は一日一日が勝負であると言える。夜のゼミでは、当日の成果報告に加えて、論文の骨子や結論について、議論が交わされる機会が増えていく。野外実験は、報告書に掲載する学術論文の執筆を通して、フィールドワークの方法論を体験的に理解させる場であると言えよう。

現地調査が野外実験では不足する場合、追加（補足）調査が行われる。フィールドへの近接性はこの点でも有利である。2年目調査は6月上旬には終了し、その後、データ（含むアンケートの集計）整理や図表の作成を経て、論文の執筆が行われる。工程の目安を示すと、追加調査やデータの整理が8月下旬まで、班員同士のディスカッションを含めて論文ストーリーや図表の作成が9月末まで、初稿完成が10月末、教員による査読およびリライトを経て、学術論文として印刷所に入稿するのが12月末～年明けとなる。報告書は公費を使用して

印刷するため、納品は2月末日までである。こうした一連の報告書作成の準備と並行して、日本地理学会や人文地理学会等での口頭発表や地域での成果公開、他学会誌への投稿・掲載がなされる例も増えている。また野外実験での調査をきっかけに、学位論文のフィールドとする学生もみられる。

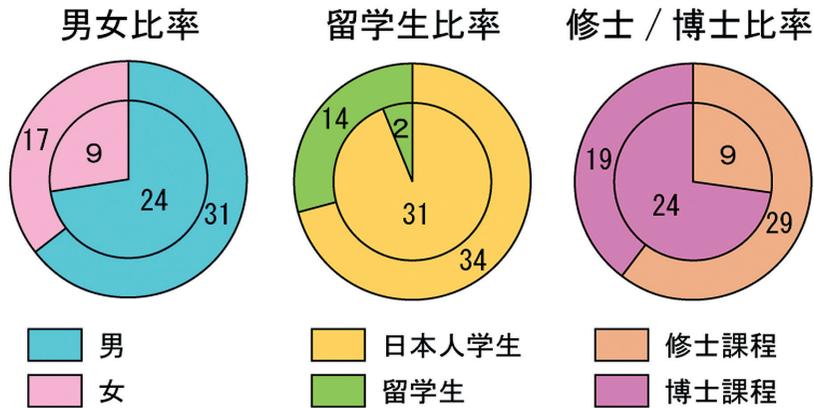
V おわりに

以上本稿では、筑波大学における人文地理学・地誌学野外実験を事例に、フィールドワーク教育の実践と成果について、学風とのかかわりから検討を行ってきた。おわりに大学院教育をめぐる環境変化と野外実験の課題について整理してみたい。

野外実験をとりまく環境は年々厳しくなっている。個人情報保護の徹底やプライバシーをより重視する社会が到来し、従来のような個人から各種情報を聞き取り、記載するスタイルのフィールドワークは次第に困難になりつつある。主題図作成において、正確な場所や地名を表記することが許されないという事態が生じることもまれではない。同時にフィールドワークにおける安全支援体制づくりも急務である。幸いなことに管見の限り、人文地理学・地誌学野外実験中に深刻な事故・事件が発生したことはないが、今後はいかにフィールドワーク時における安全を確保するのか、大学として責任を持つ必要がある。

さらには、大学院教育をめぐる環境変化もめまぐるしい。第5図は、大学院における近年の環境変化の例として、男女比率、留学生比率、修士／博士比率を示したものである。

2006（平成18）年度まで博士課程は、修士との一貫五年制であり、当時の大学院入学者の大半は博士論文を執筆し、大学等の研究者として就職していった。現在では博士課程前期（修士）と後期（博士）の積み上げ式となり、大学院進学者のキャリアデザインは大きく変化した。修士課程における学生定員が大幅に拡大され、多様な目的と学問的背景をもつ大学院入学者が増加した。このよう



単位：人 内側円：2001年 (n=33)
外側円：2011年 (n=48)

第5図 大学院における環境変化の例

な変化は、例えば修士課程学生比率の増大や留学生の増加において、顕著にみられる。また単位の実質化等により大学院生活も以前と比べて、忙しくなっている現状も見落とすことはできない。

大学院の質的・量的な変化は野外実験の実施にもさまざまな影響を与えている。例えば、1) 大学院進学者の目的意識の変化、2) キャリアデザインの多様化、3) 地理学における学術動向の変化(人文地理と自然地理の乖離)、4) 社会貢献

の要請(役に立つ研究の志向)、5) 大学院生における人間関係の変化(縦型社会からネットワーク型へ)、6) 入学者における地理学未修者の増加(基礎学力の低下)、7) 国際化にともなう日本語能力の制約、8) 新しいツールに対する教員の未習熟、などが指摘されよう。

このような状況の下、地理学の命であるフィールドワーカーをいかに育てていくか、さらなる努力と工夫が必要とされている。

本研究は2011年日本地理学会秋季学術大会(大分大学)およびIGU Kyoto Regional Conferenceにおける口頭発表およびMatsui et al. (2013)を加筆・修正したものである。本稿を作成するにあたり、筑波大学比較文化学類技術補佐員の大石貴之博士の助力を得た。また本研究を遂行するにあたって、平成22~25年度科学研究費補助金(基盤研究(A))「フィールドワーク方法論の体系化-データの取得・管理・分析・流通に関する研究-」(研究代表者 村山祐司)の一部を用いた。記して厚く御礼申し上げます。

【文献】

浅香幸雄(1977): 巡検による徹底した実証. 東京教育大学地理学研究報告, **XXI**, 39-44.
 生野真直(1975): 巡検と田中先生. 地域研究, **16**, 44-50.
 市川正巳(1977): 東京教育大学地理学教室の歩みを顧みて. 東京教育大学地理学研究報告, **XXI**, 42-49.
 石井英也編著(2008): 『景観形成の歴史地理学-関東縁辺の地域特性-』 二宮書店.
 奥野隆史(1977): 昭和20年代後半の地理学教室雑感. 東京教育大学地理学研究報告, **XXI**, 57-60.
 幸田清喜(1977): 回送私記. 東京教育大学地理学研究報告, **XXI**, 67-72.
 斎藤 功編(2006): 『中央日本における盆地の地域性-松本盆地の文化層序-』 古今書院.
 佐々木 博・高橋伸夫・斎藤 功・田林 明・手塚 章・村山祐司(1997): 「地域調査報告」20号を迎えて. 地域調査報告, **20**, 頁記載なし.

- 高野史男（1977）：大塚における地誌学派の形成と発展．東京教育大学地理学研究報告，**XXI**，73-80.
- 東京文理科大学（1955）：地理学教室．『東京文理科大学閉学記念誌』271-281.
- 福井英一郎（1977）：回顧四十年．東京教育大学地理学研究報告，**XXI**，89-97.
- 三浦鉄郎（1975）：八幡平の巡検．地域研究，**16**，51-57.
- 山本正三・尾留川正平（1978）：『沿岸集落の生態』二宮書店.
- 山本正三・大濱徹也・石井英也（2008）：座談会「大学院教育と野外実習」石井英也編著『景観形成の歴史地理学－関東縁辺の地域特性－付録』二宮書店.
- Matsui, K. and Kaneko, J. (2013): Fieldwork education practice in graduate schools : A case study on human geography and regional geography classes at the University of Tsukuba. *Tsukuba Geoenvironmental Sciences*, **9**, 21-29.

英文タイトル

Fieldwork Education Practice at the University of Tsukuba: Fieldwork as the Method of Geography

MATSUI Keisuke and KANEKO Jun

